

新しい奄美・小笠原の振興開発に向けて

国土交通省国土政策局特別地域振興官

立岩 里生太
りゅうた

復興法から振興開発法へ

昨年（令和五年）七月、小笠原諸島でアオウミガメを食べました。部位にもよるかと思いますが、モツ煮のような味でクセのない肉でした。東京・竹芝栈橋を午前十一時に出航して二四時間、上陸して最初のお昼です。夜には南天の星々を眺め、滞在中、同宿の旅行者の釣果を朝食にいただくこともありました。

翌月からは、毎月のように奄美群島を訪れました。細くほぐした鶏肉に錦糸卵や好みの具を白飯にのせて、熱い出汁をかけていただく鶏飯はいくら食べても飽きません。甘い香りの黒糖焼酎は、炭酸で割るもよしロックでもさらりと飲めてしまします。

秋の日暮れの闘牛場には独特の空気が張り詰め、琉球石灰岩を掘り込んだお墓で蟬の鳴き声を聴き、黄金色に透きとおった蝶のサナギを初めて見ました。コートのいらないクリスマス之夜には、日本復帰を記念する提灯行列に参加させていただきました。宵闇の校庭に万歳三唱の声が上がります。中学生のブラスバンドの先導で行列がスタートし、市街地の沿道ではお年寄りが旗を振っていました――。

振り返ると七〇年前まで、小笠原は五五年前まではアメリカでした。戦後本土と切り離された米軍政下にあつて、民生や産業振興はもとより最低限のインフラの整備も大きく立ち遅れていた地域です。戦禍に荒廃したまま、あるいは亜熱帯気候のもと耕地はまるでジャングルと化していました。まちなかを歩いてても塹壕跡が目につき、都道最南端のその先には

木々が密に繁っていました。

それでも復帰直後にはそれぞれ復興法が定められ、自治体や住民の方々は不断の努力を積み重ねてこられました。国も特別の措置を講じ、やがて復興法は振興法へ、そして振興開発法へと名称を変えました。本土との格差是正に加えて、島々の特性を生かし国民生活や我が国の経済発展に貢献していくという思想の表れです。



生活に多様な選択肢を

朝早く目を覚まして港付近を見て回りました。二〇年程前に訪れたときにはまだ海だった一帯が埋め立てられて、ホテルが建ち緑地が広がっています。当時も早朝、使い捨てカメラを手にまちを歩きました。アルバムには獲りたてのシマダコを片手に白い歯の眩しい漁師、通学中のやや恥ずかし気な女子中学生、得意気にポーズをとってくれた男子小学生や道端に座って煙草を喫んでいる老婦人の姿があります。

前の晩には宿の主人に勧められて、缶ビール一パックを持ち参し隣の民家を訪れると、座敷でおばあさんが三線を弾き、娘さんがシマ唄を聴かせてくれました。夜が更けるにつれて家のみなさんが踊りだし、私も見様見真似で三線を鳴らしました。



奄美返還70周年式典の一コマ(特別地域振興官付 川畑健斗)。

島の食事処では木をくり抜いた打楽器のリズムが心地よく響いています。南洋から伝わった踊りを習い、島のオクラを食べてパッションフルーツを半分に切った器に注いだリキユールを飲みました。

港を望んだテラス席に移り冷えたビールをいただきながら、わずか二歳で強制疎開させられた方の話を伺いました。本土で就職したけれど母親の想いを汲んで二六歳のときに島に戻ってきたそうです。それまで帰ることを躊躇していたのではなく、返還されるまで帰りようもなかったのだと。

船出までの昼下がり、まちの中心部のすぐ背後にある小山に登ってもととはこの島に生息していなかったメジロや、停泊中のフェリー、建替中の校舎などを眺めました。一時間くらいで汗だくになって市街地に戻ると、民家の庭先では半裸にハーフパンツ姿の老紳士がデッキチェアに寝そべっています。

今、奄美群島への移住者は大幅に増えており、小笠原諸島では住まいが足りなくなっています。他の地域にはない、あるいは失われてしまった自然や暮らしが多くの人を惹きつけています。東日本大震災や新型コロナウイルス感染症が発生して、これまでとは違う生活が、普通にあるようになってきています。

今回、それぞれの振興開発法の目的に「移住の促進」が迫

加されました。地域を維持していくためにも、私たちの生活に多様な選択肢を示していただく観点からも、その環境を整えていくことが大切だと考えています。



島の宝を次世代へ

平安時代にこの島に來たという僧侶のお墓参りをしてから、地元の方々と夕食を囲みました。気づけば四時間近くが経っています。夜半頃にも関わらず岸壁で見送っていただき二等船室で眠りに落ちた翌朝、デッキに立つと前方左手に開聞岳が見えました。群島北部の港からでも鹿児島本土までは一時間は半日近く船に揺られてそのまま試合に、あるいは舞台に臨みます。

薩摩富士とも呼ばれる美しいシルエットをしばらく遠望したあと、歯を磨くため船内に戻りました。昨晚シャワーを浴びたときに備えつけの棚から落とし、液晶画面にひびの入ったスマホには、電波が届くようになっていました。

五日ぶりの竹芝桟橋に揃いのジャージを着た中学生たちが集合しています。同船したバレーボール部員たちで、本土には滅多に來ないのかも知れませんが。午後三時過ぎの客船ターミナルに笑い声が響きます。これから大会を控えた緊張感に

どこか修学旅行のような雰囲気もあわさって、長い乗船の疲れなんて感じていない様子です。

私は少し日に焼けて少しくたびれていました。五日分の衣服とお土産を背負って職場へ向かいます。空調の効いた車内で運良く席に座れて、考えたのはこれからの法改正のことでした。

そして一年ほどを経た今、新しい振興開発法による基本方針や計画の策定が進んでいます。私がいずれに見聞してきたのは、島のほんの一面に過ぎません。医療福祉、教育機会や交通アクセスの確保、資材高騰、仔牛価格の下落や回復基調の観光への対応をはじめ、取り組むべき課題は山積しています。

ただ思い返すと、そこには顔の見える分業による手づくりの集落が浮かんできます。島内、そして世界に向けて守り伝えていくべき宝も山ほどあります。それを広く共有し、次の世代にも継承されていくように、私たちは新しい奄美と小笠原の振興開発に全力を注いでまいります。



小笠原で見たオカヤドカリ(特別地域振興官付 伊藤はるな)。